議事録

令和元年度第１回高知県産業教育審議会

日　時　令和元年７月２日（火）１３：３０～１６：３０
会　場　高知県立須崎総合高等学校　閲覧室・大会議室
出席者　森下勝彦委員、谷本恭子委員、佐々木菊雄委員、宮井千惠委員、細木忠憲委員
山﨑道生委員、野町亜理委員、中村直人委員、中越弘委員、廣瀬真理委員、
教育長（伊藤）、教育次長（岡村）、教育次長（高岸）、
高等学校課　課長（竹﨑）、課長補佐（山岡）、定通・産業教育チーフ（國廣）、
指導主事（農業・水産担当、工業担当、商業・情報担当、家庭・看護・福祉担当　各１名）
高等学校振興課　指導主事１名

配付資料
- 座席図
- 会次第
- 令和元年度　高知県産業教育審議会委員名簿
- 参考資料
  - 産業教育振興法
  - 高知県産業教育審議会条例
  - 高知県産業教育審議会規則
  - 高知県産業教育審議会議事運営規則
  - 平成３０年度第１回産業教育審議会概要
- 資料

資料１　平成３０年度高知県産業教育関係実績書
資料２　平成３０年度産業教育関係事業実施状況
資料３　平成３０年度産業系専門学科及び総合学科等における検定・資格等の取得状況調査
資料４　平成３０年度公立高等学校卒業者の進路状況
資料５　県立高等学校再編振興計画「後期実施計画」（平成 31 年度～平成 35 年度）
資料６　県立高等学校再編振興計画「後期実施計画」【概要版】
資料７　産業系高等学校の取組
資料８　教育再生実行会議　第十一次提言（案）概要
資料９　新しい時代の初等中等教育の在り方について」（諮問概要）
資料 10　「社会の変化に適応した今後の産業教育の在り方」について（答申）
平成 19 年 12 月 11 日　高知県産業教育審議会
資料 11　高知県産業教育審議会　審議計画（案）

参考資料
- 中学生のためのキャリア教育副読本「みらいスイッチ」
- 第３期高知県産業振興計画 ver. ４　ＰＲ版パンフレット（パイロット版）
- 日本一の健康長寿県構想　第３期 ver. ４　ＰＲ用パンフレット

１　開会行事
（１）教育委員会挨拶
（２）審議委員の紹介
（３）事務局の紹介
（４）会長・副会長選出
・会長に山﨑道生委員が推薦され、承認される。
・副会長に中村直人委員が推薦され、承認される。

２　学校視察及び説明（校長）

【質疑】

谷本委員

県内就職が増えているということだが、何が要因ととらえているか。

校長

ここ２、３年ぐらい、県内志向が増えてきたといえる。少子化ということもあり、県や県教委による地元での就職を促すような施策が、子どもたちや家庭に浸透しはじめていると思われる。顕著になってきたのはこの２、３年である。また、県内の企業との連携ということもある。今までは、愛知や大阪など、都会や大手企業に就職する傾向があったが、高校と県内企業との繋がりもできてきて、子どもたちの選択の範囲が広がってきたこともあると思っている。

野町委員

普通科と工業科が融合した新しい学校ということだが、お互いの科が次の新しいステップへジャンプアップしていくような取組について考えているか。

校長

まず、この３ヶ月の効果として、工業科の生徒が、普通科の生徒の授業スタイルを見ることにより、授業を大切し、落ち着いた授業ができるようになっている。特に一年生は落ち着いて授業ができている。普通科では定時制も含めて、工業の体験ができる実習を組み込み、経験、体験、見ることで、記憶にとどめさせることをやっている。今の段階では生かせなくても、いつか記憶がよみがえり、体験したことが、その先々でやってみようという気持ちに繋がれば大きな財産になるのではないかと思う。

せっかく工業と普通科が一緒になったので、新しい３本目の柱ができないかと模索中である。

佐々木委員

就職のことについて、今までの継続した取組に関しては問題ないと思うが、新しい専攻などの就職先開拓等の手応えについて状況を教えてほしい。

校長

まず住環境専攻について、この地域に土木建築を学べる学校がなかったので、この高吾地域から非常に大きな期待をいただいている。近辺から、土木建築関係の仕事は結構いただいており、また、県全体を見ても労働者が少なく、高知市内も通える範囲なので、非常に期待されてる。生徒数が 20 名なので、住環境専攻の土木建築については、ほぼ希望するところに就職できると思っている。

機械制御専攻については、制御やロボットなどはこれからの分野であるので、大手企業からはロボット操作、制御的なところの求人はある。ロボットを作ったり、ロボットを工場に配置して自動化するという分野まで広げなければと思っているが、まだその分野の求人は取り付けていない。

３　議事

（１）平成30年度高知県産業教育関係実績報告及び産業系高等学校の取組について

資料１～７について事務局より説明（國廣チーフ）

【質　疑】

山﨑会長

須崎総合高校の校長の悩みは何か。

校長

キャリア教育の部分において、普通科を主体とした教育課程、学習指導要領等が大きく変わる。大学を出てからの就職の仕方が大きく変わる。就職が決まる生徒はすぐに決まるが、決まらない生徒は１年間かけて就職活動をしないといけない。大学を出ても就職が決まらない生徒が増えてくる可能性がある。そのことを考えて、小中学校を巻き込んでキャリア教育を進めていく必要があると考える。大きなテーマである。

工業科においては、人と人との間に機械やＡＩなど情報系のものがもっと入ってくるだろうと思われる。ロボットをつくる人、ロボットに仕事をさせる人、ロボットに仕事をしてもらう人、ロボットに働かされる人などが出てくるだろう。そのような状況において、工業科としてどうするのか、制御系やＡＩやロボットをいかに活用できる人材を育てるかが課題である。

山﨑会長
　就職活動に時間がかかるというのは、本人の高望みなのか、企業のハードルが高いのか、いろんなケースがあると思うが。
校長
　普通高校においては、就職指導にあまり重きが置かれていない。就職を希望する生徒については、それぞれ指導しているが、大学等に先送りしているところがある。工業高校と一緒になったので、工業科の生徒が就職活動している部分をしっかり見せ、将来を意識させるようなキャリア教育をしていきたい。
山﨑会長
　面接時に、先生の指導で回答を作り上げてくる生徒については、こちらは見抜く。素直で好奇心のある生徒を送ってくれることが一番大事である。
中村副会長
　就職のシステムが激変する。ある時期からスタートということがなくなる。大学の場合は３年生の後半からインターンシップなど、企業等と提携してマッチングするシステムを開発しているので、それで対応することになっているが、高校はどのように対応するのか。
校長
　大体同じような感じで、インターンシップや企業見学等で情報を得ながら、徐々に自分にマッチングしたものを見つけていく形である。一番多いのは夏休みに、５日とか１週間程度インターンシップに行かせて、最終的に希望を確認するという形である。
中村副会長
　大学はインターンシップのシステムに少し問題が起こっている。長期間大学を休んで行くので、大学の勉強が疎かになるということがある。１年間ずっと制度を使う学生も出てくるので、４年間と言っても３年と少しぐらいしか勉強せず、卒論も中途半端になったりする。大学では卒論が一番重要であり、これで課題解決力や思考力を磨くのだが、それをやらないプログラムに不安がある。期間が少なければいいが、長いインターンシップを必要とする企業もある。この長さがかなり問題で、インターンシップを単位として認める以上、行かせないということはできないが、工業系だけでなく、普通系でも休んでいる学生が何％かいる。そうすると、休ませたことについての対応など、非常に難しい問題が出てくる。それを心配するが、高校ではどうか。
校長
　基本的には、長期休業中、夏休みに行うことになる。県外では企業に長期間行って、それが単位として認定され卒業するということをしているところもあるようだが、本校の場合は夏休みに行ってきたものに関して、単位として申請する生徒はほとんどいない。通常の授業に支障が無い日程でしかできていない現状である。
中村副会長
　ＩＴを高度に使ってマッチングをうまくやるようなシステムなど、いろいろシステムがあるようなので、工夫をするといろんな形ができるだろう。また、ネットのシステムの導入は高度にやらなければいけなくなるので、そのようなことを含めて検討されたらと思う。
森下委員
　就職の応募は１人１社なので、学校は生徒の適性を見定めて指導をされているということか。
校長
　そのとおりである。
事務局
　普通科のあり方については、全国的に課題になっている。知事も委員である教育再生実行会議の第11次提言がこの５月に出されたが、その中では、従来の満遍なくすべてを学習するということから、何か特色を、例えば地域と連携した取組をするなど、そういった特色を設定して将来につなげていくという考え方になってきている。そのため、普通科のあり方について、４月に中央教育審議会に諮問され、これから１年ぐらいかけて検討することになっている。来年にはその答申が出されるだろうが、普通科もこれから特色が大事になる。
森下委員
　我が社では、高卒の採用を復活して７、８年になるが、学校からの推薦で優秀な生徒が入社してい

ると思うが、頑張って勤務していれば、面白い業務や華やかな世界もあり、そのような部署にいけるようになるが、少し先の話なので、そこに至るまでに辞める子がいる。銀行という職になかなかついてこれずに脱落していくケースも増えてきた。先生方にも銀行の実態をもっと分かっていただきたい。教員の企業研修なども検討してほしい。

中越委員

普通科は、その後の選択肢が幅広くあるように思う。工業科の高校に行くなど、早く路線を決めている生徒はいいが、そうでない生徒にとっては幅広く選択肢を持っていることが大事ではないか。

事務局

従来は、普通科においては幅広く、基本的な部分をしっかり学び、３年間の中で方向性を見つけ進学や就職をしていくというのが役割だったと思うが、３年間の中で、しっかりした自分の目標を見いだせない生徒が増えている現状がある。そういったこともあり、ある程度幅を狭めた中で将来をしっかり見据えて高校生活をしてもらおうというような提言が出されていると思う。

山﨑会長

東工業高校の校長が、生徒全員をインターンシップに行かせると言っていたので協力するが、学校はだいぶ負担になるのではないか。

事務局

中学校では全員がインターンシップを行っている。高校でも、早く自分のやりたいことを見つけることで進学や就職につながる。就職であれば、そのための資格試験などを受けるチャンスが早くから出てくる。また、各県立学校では、地域を知る取組をしている。最初に話があったように、地元にもっと関心と愛着を持ってもらい、興味がある仕事も見つけ、将来県外に出て行っても、いずれは帰って来るようにしていこうということで、県立高校では、ほとんどの学校で地域と連携した取組をしている。段取りは大変だが、当然やっていくべきことである。

また、普通科についてだが、文系だからといって、ほとんど理数系の勉強をしないのは問題があるので、見直しをしていくという方向性である。いずれにしても早いうちに目標を持ち、それを学校生活等で実現していけるような取組にしていきたいと考えている。

中村副会長

数十年前は、職業現場が身近にあり、それを見て、どういう能力が必要か、どんな資格が必要かという想像がついたが、現在は企業が激変して、インターネットで急に企業が立ち上がり、売り上げが急に伸びて大きな企業になるといった話がある。うちの大学でもそのようなネット関連の企業に就職を希望する学生が出てくるわけだが、目の前でその職業の状況を目の当たりにすることはできない。どんな能力が必要かもよくわからず、５教科をすべて学ぶことで本当に対応できるかどうかもよくわからない。その業界からみると、職業高校と普通高校の差があまりなくなりつつあると思う。

そのうえで、大学や企業側から高校の先生方にお願いしたいのは、数学でも日本語でもそうだが、物事をちゃんと論理的にとらえてどのように解決するか、課題を導き出すかを考えられるかどうかが重要で、どの教科でもそれをベースにきちんと学んでおいてほしい。

少し、いろんなことに興味を持って学ぶことが難しいのかなと思う。教科という中で論理構造をきちんと身に付けないと、これから経験する社会の中で身に付けて対応するのはすごく難しいだろう。

もう一つ、大学の学生から、高校の先生に、とにかく大学に入るまで頑張れ、入ったら何とかなるからと言われると聞く。大学に入った後の方が大変で、勉強しないと希望のところに就職できないし、成績も意味がある。私は経済マネジメント系だが、６割ぐらいの科目は数学ができないと理解できない。経済学部の３割ぐらいの学生は、数学をいくら教えてもなかなかついてこれず、やっと３年生ぐらいになり、いろんな基礎的な数学ができるようになって、卒論が書けるようになる。基本的に高校までの教育をしっかり身に付け、学び続けないと駄目だということを強く言っておきたい。就職したらそれがゴールかのように思うようだが、そうではなく、学び続けないと駄目である。その後、どの職業においても、ずっと学び続けなければいけないことを教員だけじゃなく、生涯にわたって分散して言い続けるということがすごく重要であり、ぜひそれをやっていただきたい。

もう一つ、そのように熱心にやり過ぎると先生方の働き方が心配である。働き方改革は県も率先してやっていると思うが、生徒に教える中身を充実させるためには、先生方も休んで、じっくり教材研究や教え方を研究し、将来を見据えて何か意味あることの話をしてもらうことが重要である。新しい学校で二つの学科があり、相互に見ないといけなので、心配がすごくあると思うが、その辺の話で何

かあれば聞きたい。

山﨑会長

小学校、中学校よりは、高校の先生は少し楽らしいが。

中村副委員長

私もそう思っていたが、本日の、造船や機械の先生の話では、生徒は放課後残って７時や８時まで作業をしているということだったので、そうすると先生も残っているということだろう。

山﨑会長

それは楽しいからだろう。

中村副委員長

ものづくりをやってる場合はそうかもしれないが、毎日毎日やるとなると少し心配である。そこをうまくマネジメントしていくことも重要である。

山﨑会長

働く者の権利がある。しかし、その裏側に義務があって、朝８時３０分に出勤して、上司の言うことを聞いて、部活も給料に含まれていて、それが働くということであって、権利を主張するのであれば、背後の義務というものも高校１年生から教えてもらいたい。社会の大事な部分もわかると、もう少し粘りが出てくるように思う。先生も言いにくいかもしれないが、それが社会の実態である。権利と義務の両方を教えていただきたい。

事務局

そこは先生がちゃんと教えてほしいが、先ほど森下委員が言われたように、就職してすぐに花形の仕事をするのは無理なわけで、学校では、そのような話をしていると思うが、現場に出た時にそういう期待もあるのだろうと思う。ただ、権利と義務のことや、その仕事はこういった仕事だということも話していかないといけないし、基本的にそこから進路についての提案をするというような教育はされてると思っている。

宮井委員

看護の立場からだが、看護師の場合は、看護師になるという強い意志を持っている者が多いが、大学は、親が行けと言ったから・・というような選び方をしている者もいる。看護系の学校の場合、途中で進路変更できればいいが、卒業して病院に就職してから、実は自分は看護師になりたくなかったということが面談時にわかったりする。そういう人の中には、途中でやめていく者がいるので、それはもったいないと思う。また、自分の考えでやめるというより、人のせいにしてやめていく者が多いように思う。これは幼稚園からの教育からつながるものだと思うが、自分で考えて判断するとか、自分で責任を持つということが大事であり、親に言われたからというような進路選択は非常にもったいないと思う。

キャリア教育は、すぐには効果は出ないと思うが、そのように現実的に考えることが大事である。学校では国家資格が取れるように指導するが、合格して卒業できたら人生終わりではない。それからまた大変な仕事がある。指導の仕方を考えないといけない。

須崎総合高等学校は、教員も生徒も挨拶してくれるし、明るく楽しく学んでいると感じたので、このような心配はないと思うが、一般的にはこういう傾向があると思う。

事務局

普通科では、しっかりとした目標をもって入学する子もいるが、選択肢の消去法で、例えば工業は向いてない、農業はちょっと無理かなとかいうような形で、普通科に入ることを判断する生徒もいる。また、保護者の影響で選ぶ者もいる。確かに 15 歳で選択するのは難しいと思うが、今求められているのは、主体的・対話的で深い学びである。特にその主体的な部分は、将来、自分の生活をつくっていくうえで一番大事である。そのあたりの指導は、力を入れていくことが大事である。

宮井委員

主体的というのは、経験がないのでしょうがないとは思うし、昔とは違うので難しいのだろうという印象である。

（１）本県産業の10年後の姿を踏まえた今後の産業教育のあり方について
今後の審議の進め方について
資料８～11及び参考資料について事務局より説明（國廣チーフ）

【協　議】

山﨑会長

私の偏った意見を一つ。そのような熾烈な競争の中で、技術的なことで勝負するとなると、大都会の後ろをトボトボ歩いている姿しか見えてこない。知事がどのような高知県にしたいのか、住んでいる人がどのように幸せな生活を過ごすのか。経済的なことを求めるのか、貧乏だけどみんなが楽しい生活を求めるのか、何を求めるかだと思う。根本の話である。非常に難しいテーマを持ち出された。

事務局

説明が非常に大きな話のように聞こえたかもしれないが、高知県は産業振興計画で様々な取組を進め、雇用も増えてきた。また、日本一の健康長寿県構想など、医療福祉の面も進んできいてる。そのようななかで、高知県の産業界において、高知県の産業系高校はどういったところに力を入れていくべきなのか、高知県民や高知県の産業の方々から見たとき、高知県の産業教育はこのようなことをやるべきだとか、こんな授業をやってもらいたいというような話をぜひ聞きたい。主体的に考えて、社会で生き抜いていく力というのは、日本全体で考える大きな話だが、高知県として、先ほど中村副会長から話があった、新しい仕事がどんどん出てきて、数学が非常に大事だということは普通科として強化していかなければならない話であるが、今後、ＡＩやＩｏＴが中心に高知県の産業が進んでいくとすれば、その方面において、もう少し、現状に比べて突っ込んだ教育、学科、コース等が必要になってくるのではないか。産業教育の場において今後の高知県の産業界が必要とする人材をどのように育てていったらいいかということについて話が進められないか。そのための教員の育成、おそらく情報系の教員は大幅に強化し、新たに採用していくようなことも出てくるだろう。そうした方向の話を出してもらいまとめていきたいと思っている。

中村副会長

いろんな産業で、女性の進出を圧倒的に高めることを他県と違ってきちっと行ったらと思う。工業高校や工科大の工業系、情報系は女子が一割もいないが、化学や生物は、３、４割いる。経済は３割ぐらいいる。論理的に数値にこだわって物事を深く考えるということが女子は弱いという意識があるのかもしれない。意図的に女子を半数ぐらいにしたらいい。しかも、働き方改革は女性の意見がすごく重要だと思うが、あまり吸い上げられない社会構造になっている。子どもの数も減っていかざるを得ないので、そこを重視した政策によるサポートがいると思う。また、大学と高校と企業の距離が、他の県よりも近いので、その部分を進展させ、例えば５時以降に高校生に大学の授業を開放しているので、インターンシップをして更に勉強したいなと思った高校生が大学に通うことで単位認定する、県内のどこの大学に行っても単位を取れるということにしたらいい。これはアメリカではどこの大学でもやってる。そうすると、県内の大学に進学すると 10 単位分ぐらい取らなくていいので、３年ちょっとぐらいで卒業単位が取れ、1 年間のうちにインターンシップを半年、海外に半年行くということができるようになる。高知県型の県内に女性をたくさん残し、しかも高度な産業構造になるような人材育成のシステムを独自に考えればいい。

教育長が言われたように、プログラミングの教育は絶対必要である。今、学生にいろんなことやらせているが、パソコンの中に自分専用ロボットを組立てて、自分がやろうと思ってる研究開発情報をロボットに集めさせている。一晩中働かせて、自分の必要な情報を 1 週間ぐらいで全部整理させる。そういうことができる子とできない子で、研究の進展がものすごく違う。それができる子は次々に新しいシステムを自分で確立していき、いろんな企業に来てくれと言われるようになる。しかし、そうなるとほとんど県外に出てしまうので、それは問題だなと感じている。

産業系で仕事をしたいと思ってる子のためにＡＯ入試や推薦入試などいっぱいある。会長が言っていたように、好奇心が強い生徒は、勉強する気があれば大学に入れる。企業が求めている人材にするために、両方の機関が協力し、人材を残すようなシステムをつくることが重要だと思う。その意識を小中学校の頃から作るのがとても重要であるので、この未来スイッチの冊子はすごくいいと思う。これをもっと進めて、本当に県内に残って企業に就職し、県内大学で企業が求めるレベルまで人材を育てようというところまでいってくれるとよい。実際企業で働いた経験を持ち合わせた先生は１割にも満たないと思うが、そうすると、高校生に企業への憧れを持たせるようなことが言える先生がどれぐ

らいいるのかと思う。あまり言えないのなら、卒業生や企業の方を呼んで、インターンシップもして地元に残るようなシステムの構築が必要だと思う。例えば、ここの学校の卒業生で、今４年生で、ちょうど経済マネジメントで学習している者が１部上場のすごく大きな企業に就職が決まった。学力がとても高かったというわけではないが、地元のために働くという意識がとても強く、地域の活動には全部出ており様々なことを勉強して東京の企業で内定をもらった。こういうことはモデルになると思う。もちろん企業との連携も必要だが、うまくシステム化して、卒業生が高校生に身近な立場で語りかけることはすごく重要である。やはり年齢が近い人の話を聞くと響くということがある。彼らがもし「数学が重要だからもうちょっと勉強しよう」と言えば、やる気になるような、少し上の先輩が重要だよと語りかけるシステムを入れてほしい。女子をうまく育てることもとても重要だと思うが、私の独断である。

野町委員

農業でも、女性を前に出した方が儲けるし、作業効率がいいという考え方が業界の中にある。しかし、農村地域とか農村社会の中ではまだまだ男女共同参画が未熟である。若い時から共同参画のきっちりした教育を受けることによって、どの産業に行って働いても認め合える社会を構築できるのではないか。農業はすべての人を受入れる産業だと思っている。私も工業高校を出て農業を 40 年しているが、あらゆる産業と繋がって農業も発展してきたし、これからも発展しようとしている産業だと思っている。今からは高齢化で担い手がない農業になるだろうという見方の中で、ＡＩを使ったり、外国人労働者や小さな家族経営の農家でも使える便利なスマート農業を導入しているということも聞いている。それを導入するにしても、農業高校の今の教育だけではなかなか対応できない。しかし、様々な産業の人が農業に参入してくれることによって、対応ができていくのではないかと希望を持っている。

私の住んでいる安芸市もたくさんの新規就農者を受け入れている。技術面は農業を長年してきた方が教えるのだが、その技術を踏まえて、自分の技術を身に付けていくためには、五感を使って植物と対話するような職業だと思っている。そのような教育も必要ではないかなと思う。機械は電気がなければ動かず、エネルギーが必要である。人間は自分でいろんなことができるので、五感を働かせるということも基本として教えてほしい。また、気象を読むのは難しい。農業の栽培技術の中で、気象がすごく重要なポイントになっているので、気象についても学んでほしいと思う。

山﨑会長

農業の単純作業は工業が引き受ける。

野町委員

農業も農業だけじゃなく、工業など様々な産業と融合できるような、どんな産業も受け入れるような気持ちを持った子どもがたくさん大人になってくれたらいいなと考えている。

ちなみに私の娘は、大学行って勉強して自分が満足したのか、全然関係ないところに就職した。息子も経済大に行き、しばらく経済関係で働いたが、電気の方がいいと言って、学校を行き直し、電気関係の仕事をしている。そのようにやり直しがきく気持ちとやり直しがきくチャンスを今の社会は与えてくれるので、私はいいと思っている。私は就職したら一生そこで働くものだと親からも意識づけられてきたが、15 歳や 18 歳で自分の一生をみつけるのはなかなか大変である。

山﨑会長

高知は、製造業が２割ぐらいである。農業は 1200 億ぐらいの産業である。水産も 500～600 億ある。地理的ハンデのある自動車系の産業は高知県では絶対無理である。ＩＴはまだ少し期待できる。だから、気候、風土を生かした農林水産系や機械系、観光に役立つ機能の一つとして、人間関係を大切にする県ということで、リピーターが増えている。そういうバランスで幸せな国を作って欲しいと思う。

谷本委員

今、少子化で数が少ない子どもたちの中に、心が弱い子どもたちが増えている。子どもたちが力をつけるケースとして、高校の時が、最後に回復できる時期である。生きる力や自分への肯定感がなければ、ひきこもりやいじめなどの問題を乗り越えられないので、高校生の時にお願いしたいと思う。

山﨑会長

それは家庭の仕事なのでは。

谷本委員

今、その家庭でできなかった子どもたちが、本当に傷つきながら育っており、家庭に望めない時代

になっている。

山﨑会長

　それはわかるが、先生にそこまでの責任があるのかどうか。その件を先生に押しつけていいのかと思う。

事務局

　先生は小中高で一生懸命取り組んでいる。今までは、個人の先生が対応する学校経営だったが、先生方がチームで子ども一人一人の状況をしっかりチェックしながら、おかしいと思ったことを情報交換して、早め早めの対応ができるような、早めに専門機関につなげるようなことを行っている。本当に家庭の教育力が弱ってきて、それも先生がやることなのかということもあるが、それをやらないと生徒が健全に育っていかないという現状がある。そこは小中高において、高知県は本当に一生懸命やっている。それに必要な体制をつくっており、しっかりＰＤＣＡをまわしながら成果が出てきている。一生懸命頑張っていきたいと思う。

山﨑会長

　自発的に学校が努力している部分は敬意を払うが、社会がそういう取組をしろというのは越権だと思う。

事務局

　中学校の時に不登校だったという生徒が、学校に行くようになったというケースも多く、特に産業系の高校では、各学科の実習があるので、実習をすることで、生徒が学校に来てやりがいや目標を見つけるというケースが非常に多い。小中高しっかり連携して、もちろん家庭もしっかり協力していただく。

中越委員

　労働組合から言うと、教師の時間外労働の問題、働き過ぎの問題がある。精神的に病んで休んでいる方もおり、昔の金八先生ではないが、ああいう形は今は難しいので、やはり業務を分散するようなことが必要ではないか。

事務局

　金八先生は１人でやっていたが、なかなか１人でやることは難しい。この６月県議会で答弁したが、高知県はスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーを全国的に見もて多く配置している。まだこれから増やしていかなければならないと思うが、外部の専門家を入れたチーム学校の体制をしっかりと作っていきたい。

３　閉会行事